

# 福音の園だより

【第二十二号 二〇〇六年 十月 七日発行】

350・0016 埼玉県川越市木野目一八七八番地一

特定非営利活動法人 福音の園・埼玉 事務局

☎ 049・230・1111

FAX 049・230・1112

## 紀行文 モンゴル見聞録(その3)

M・S

(続き)「ママ、はやく迎えに来て」と泣いていたという。福祉大臣に面会を求めて、実状を訴えたところ、大臣は解ってくれたが、この大臣は新しく着任したばかり、しかも法改正のあったことなので、どうにもならないらしい。執行にあたる役人が、「袖の下」を要求していると思われるが、運営費はギリギリ、「袖の下」を工面できない。子供たちを、手元にもどすためには、園長が三人の孤児を自分の養子にするしか方法がないという。彼女は、この話をしながら、ぼろぼろと涙を流していた。手塩にかけて、日夜たがわず養育してきた三人の子供を「法が変わったから」と言って連れて行ってしまった国の福祉局の役人の非情さ、理不尽さを嘆いていたのだろう。彼女は、クリスマスチャンド、日曜日には教会へ礼拝に行っているという。「このことは、神様が、国から私たちに与えてくれた試練かもしれない。」とも言っていた。何とかして子供たちが元の孤児院に戻れますようにと祈らずにはいらなかった。

ちなみに、モンゴルの日本大使館で市橋大使に、

以下の話を伺った。役人の腐敗が蔓延している。六月の国会で、汚職防止法が成立したばかりだと。国会ではいろいろ議論がなされ、一歩ずつだが先に進んでいると大使はおっしゃった。これは、私たちがモンゴル訪問で、見聞したことの一部です。

(終わり)。

## 開園二周年に寄せて

### 李下に冠、瓜田に靴

グループホーム 福音の園・川越 ホーム長 杉澤 卓巳  
昨年、一周年に際して、認知症利用者に対応できる望ましい介護従事者とは「自分自身を客観視できる人」だと記した。そして「キリスト教精神のホーム運営に関してはさらに掘り下げ、思索しなければならぬ」と結んだ。この点を記したい。

### 二足のわらじを履くことなく

以前、袈裟を掛けたある僧侶がテレビのバラエティ番組に度々出演していたことがあった。心霊怪奇ブームで引つ張り風。本業そつちのけで内心、檀家信徒総代や所属宗派本部は何とも思わないのだからかと危惧していた。案の定、事件を起し騒がれた後、テレビ画面から消えた。

他宗教界を非難できない。北陸のある県で、牧師が兼務する社会福祉法人で、補助金を教会へ不正流用して逮捕された事件があった。牧師が幼稚園や老人ホーム責任者などを兼ねる事例が多い。人の疑いを招きやすい行為は避けようと、教界や宗派団体が内部規定を設け、率先して模範になろうと自戒しているという話は聞こえてこない。

「手広くやれば、どこか手が抜けてしまうんで！」と述懐された堅実経営者の言葉が忘れられない。「二兎を追う者は一兎をも得ず」である。

## 旧約聖書の信徒預言者アモスにならって

三十年前の七月二十七日、「元総理大臣逮捕！」に日本中が驚愕した。郷土が生んだ総理大臣だっただけに感慨ひとしおだった。私はこの年、牧師を養成する聖書学校で学ぶ神学生だった。同年、将来への決意・志を、次のように記していた。

「ところが、アモスは牧畜業を営む中で、不正・不義、圧迫といった事物を実際に見聞していた。職業預言者にはわからない「舞台裏」を知っていたのだった。

これからの生涯を思う時、この信徒預言者アモスにならって、まず自らが福音の生活化をなし、確信を持って「神に会う備えをしなさい」(同書4・十二)と説教できる者になりたい。(東京聖書学院機関誌第十三号)

教会牧師を辞職し、老人福祉の現場に身を置いて十六年が経った。振り返ると、三十年前の出来事と決意・志が、現在を決定付けたように思う。「二所懸命」という漢字は、「一つの所(一つの仕事)に命を懸ける」と書く。私にとって「社会貢献」とは、世に名をあげることではない。「李下に冠を正さず、瓜田に靴を入れず」、順法倫理観に基づき、社会人として生きることである。そして、これが私のホーリネス(聖潔)である。

この文章に対する皆様のご感想やご意見、ご批判をお待ちしております。

## …… 開園二周年記念バザー ……

日時・十月二二日(土)、九時半～十一時半  
場所・屋内(日用品、喫茶コーナー、他)

屋外(イチゴ苗即売、焼き芋、他)

\*園芸療法体験コーナー(花の三角ツリ)

皆様の、ご来園を心よりお待ちしております。